

のは、見方によって、意見が異なる。あるいはまた、東北タイや南タイの共産主義ゲリラの動きを、ひじょうに大きくとりあつかっているが、はたして、実態がそうかどうか、問題となる。とにかく、稀にみるほど Controversial な書物である。

この Controversial なことの原因としては、あまりにもアメリカの援助計画担当者的な視点が強いこと、これと関連して、ともすればバンコクにおける見方にかたより、村落段階が軽視されてきたこと、あるいはマクロ的考察が勝ちすぎて、ミクロ的観察が軽視されていることなどがあげられよう。その敘述のなかには、まったく鋭い分析だと思われる点もあれば、あまりに幼稚だと感じないわけにゆかない点もある。

なお本書は、Prager Special Studies in International Economics and Development の 1 冊である。こうした実地経験にもとづく低開発国経済研究がつつぎ出版されることを期待する。(本岡 武)

九州大学比較教育文化研究施設『東南及び南アジアにおける人間形成の総合的比較研究』第 2 集、1966. 98 p.

従来ヨーロッパ中心に道徳教育の比較研究を遂行してきた本施設は、新たに研究の対象を東南アジアに向け、タイ国、インドにおける人間形成のリアルな姿を追求して世に問うたのが第 1 集であった。第 1 集においては、宗教がタイ人やインド人の人間形成にいかにか大きな役割を果たしているかを改めて深く認識させられたのであるが、第 2 集においてはタイ国における小学校、中学校の教科書を取り上げ、学校教育の場における人間形成の直接資料を提供している。ここに収められたのは中学 3 年の仏教教科書と小学 5・6・7 年用および中学 3 年用の社会科の教科書である。小学校では社会科は〈国民の義務〉となっており、中学校では社会科は〈道徳〉となっている。難解なタイ国語から直接翻訳された貴重な研究資料であり、その分析の結果は後に刊行される予定とのことで、その刊行が待たれる。国語教科書もつづいて刊行される予定のようである。

仏教の教科書では仏陀の生涯、三宝五戒、五正善、仏陀の教えなどが主な教材となっており、むずかしい仏教の教説がかんでふくめるように解説されてある。

各章末には〈問題〉と〈まとめ〉とが用意され、教材が生徒に徹底的に習得されるように配慮されている。タイ国では仏教は国民の日常生活に深く浸透し、その精神生活の安定に役立っている。学校生活は合掌と「仏法僧に帰依します」という誓唱から始まる。教室の正面には仏像が安置され、毎週 1 回以上宗教の時間がある。この宗教の教えによって国民の道徳生活も保たれており、宗教の外に道徳はないのである。宗教と教育とを分離しているわが国では想像できない世界である。中学 3 年の社会科〈道徳〉の教科書を見ても、仏教の教科書と内容において大きなちがいはない。ただ章末に〈むずかしい言葉〉と〈質問〉とが用意され、理解と整理に役立たせるよう配慮されている。親切な教科書という感じがする。

社会科〈国民の義務〉を見てみよう。歴史と地理という教科が別にあるので、社会科の内容はいわば公民科的なものになっている。教材は各学年 5 章から成る大単元主義である。「ぼくらの学校」というような手近な問題から「税金の徴収とその用途」というような大切だが縁遠くなりやすい問題にまでわたっている。その説明はきわめて懇切丁寧で、やや教訓的であるが、教師に絶対的な権威を持たせているのが目につく。その点わが国の社会科に見られたような「はいまわる自由主義」的な傾向は見られず、むしろ迫力を感じず。各章末には〈まとめ〉、〈実践実行〉、〈問題〉が用意され、道徳教育としても行きとどいた配慮の中に力強さを感じず。道徳教育においてタイ国は決して後進国とはいえないのではないか。(高木太郎)

Kramol Tongdhammachart. *American Policy in Southeast Asia 1945-1960, with Special Reference to Thailand, Burma and Indochina*. Bangkok: Faculty of Political Science, Chulalongkorn University, 1965. v+449 p.

チューラーロンコーン大学政治学部には、カモンという名前の若い学者が 2 人おり、2 人ともよく切れ、2 人とも政治史を得意とするが、これは、そのうちの国際政治をやるほうのカモンが、アメリカ留学中に、ヴァージニア大学に提出した学位論文である。チューラー大政治学部の Textbook Division から、学生の教科

書として出版されたもので、市販はされていない。

本書は、なによりもまず、タイの学者が、アメリカの東南アジア政策に、学問的に真正面から取り組んだ、恐らくはじめての試みとして注目される。

筆者は、アメリカの東南アジア政策の展開を、

- (1) non-involvement の時代 1945—1949,
- (2) cooperation の時代 1950—1954,
- (3) commitment の時代 1955—1960,

と3つの時期にわけて、タイ、ビルマ、インドシナの3国家地域を題材として、論じている。筆者は、概念図式として、interests→objectives→policiesの3つの概念のセットを駆使している。論理の展開は明確だし、文章も簡潔でクリアである。そのクリアな点は、本書の優れた特長のひとつであろう。また、豊富な文献をフルに駆使しているので、質的な厚味がでている点も評価したい。

筆者は、1945年から1960年にかけてのアメリカの政策に、つぎの5つの特徴を見出している。第1は、確固たる原則をもって臨むべき段階(特に1945—1949)に、便宜主義をもって臨み、現地側にいたずらに suspicions を招来せしめた。合衆国にたいする現地の不信感、植民地主義にはっきりとした原則的態度決定をしなかった40年代にはじまっているという。第2に、アメリカ政府は、非共産主義的な左翼への理解と洞察に欠けている。反共右翼に甘かったのは失敗であったと断じている。第3に、反共政策の方便として、経済発展よりもむしろ軍事力強化という実利政策に流れがちである。第4に、特に1955年以降、現地諸国の歓心を買うために、ドルを乱用する傾向にある。このやり方では、一時的な歓心は買えても長期的な忠誠は買えないという。第5に、アメリカ政府は、自己の万能性への過信、という欠点をもつ。その過信のために、地政学的な謙虚な読みもできなければ、現地の感情に素直に対応する心掛けも忘れがちになっているという。

この5つのコメントはいずれも鋭く、アメリカの政策の盲点を突いていて、大方の共感を買うはずである。

ただ、いささか気になるのは、筆者が、はたして、自分自身の心底の声として、この結論を出したのか、あるいは、タイ国の国家利益を読み込んだ上で、この結論に至ったのか、ということである。私の想像では、合衆国国内の反政府的なさまざまな論調を、本書

はうまく吸収しているのではなかろうか。チューラー大の若い学者に共通する、極度に没価値的たらんとする姿勢——つきつめると自分自身の価値観を抑制することにつながる姿勢、のかげりを本書にも見てとれる。いずれにせよ、本書のすべての論理展開が、アメリカ的にスマートであり、そこに、チューラーの政治学部の学風を見ることが可能である。

そのほか、各国の国家利益の捉え方にも一面的なところがあり、また一部の資料操作にも不注意な個所がある。それにも拘らず、やはり、ひとつの風格をもった理論展開は買えるし、高水準の論文として一読に値する。(矢野 暢)

J. Marvin Brown, ed. *AUA Language Center Thai Course*, Book 1. Bangkok: AUA Language Center, 1966. vi+118 p.

新しく出たタイ語の入門書である。本書は教室での授業1時間に対してラボラトリー1½時間の割で進めて、全体を60時間で仕上げるように仕組まれている。ラボラトリーを使用しない場合は50時間で終わることができる。ただし、本書は、“Book 1”と示されているように、1冊だけでタイ語の全体を身につけたものではなく、ほんとうの入門段階だけを身につけたものである。さらに高い段階を習うには Book 2, Book 3 と進まなければならない。

全体は Introduction と 22 の Lessons よりなる。まず Introduction で全体の方針、およびタイ語の音素体系、表記法について説明する。各 Lesson は (1) Tone Practice, (2) Expansions, (3) Patterns, (4) Dialog, (5) Consonant Contrast, (6) Tone Contrast, (7) Taped Drills, (8) Numbers, (9) Thai Writing System と 9 つの sections より成る。本書の特色として、Tone の練習の際、単調な発音練習とちがって、色々な入れかえ練習や、応答練習を用いている点をあげることができる。例えばタイ語における 5 つの tones を練習するのに、ただこれらを並べるだけでなく、/dii máj/, /jùu máj/, /dāj máj/, /rǒon máj/, /sǔaj máj/ というような入れかえによる練習をさせる。Tone Practice のみならず、他の sections もすべて、理論的な説明はいっさいはぶき、くりかえし訓練させることを目指している。本書の各